

教師は「教育のプロ」である。

子どもを「教育する」とことを専門とする職業である。

だから当然「教育することのできる技術方法を持つてある」ということが条件となる。

医師と比較してみると、いいだらう。

私たちは、どんな医師を良いと思うだらうか。「明るく、優しく、公平であって、知性的である」医師は好ましいにちがいない。特に、人間と人間としてつきあう場合なら、これだけいい。

しかし、私たちが患者として医師とつきあうとする。

「三日間、高熱が続いているのです」と言ったとき、医師が「それは、ひらりでしようね」という優しさを示してくれるだけで満足するだらうか。常識的な病気に「原因は分りませんし、治療方法も分りません。でも、とにかく一生懸命やってみます」という医師に命を預けるだらうか。

もちろん、その病気が難病であって、本当に治療方法が分らないのならしかたがない。

しかし、医師としての「技術・方法」からすれば、「分るはずである、治療方法はある」という場合に、「よく分りませんがとにかくやってみます」という医師に命を預けることはない。

つまり、医師は「医療活動をする技術なり方法なりを持っておる」ことにおいて専門職なのであり、「技術・方法」を駆使して、患者の病気と闘ってくれるのである（この原稿を書いた直後、中堅医師の医療技術習得を義務づけるとの新聞記事が出た）。

教師も、「そういう場合はこのような方法があります」という「教育の技術なり方法なりを持っている」ことにおいて、専門職なのである。

ところが、「技術なり方法なりを持たないで」「とにかくやってみます。一生懸命やってみます」と言っている教師がいる。情ないことには、そうした心構えがあれば教師として立派であると思いつぶやく風潮が一部にある。

どんな職業の人でも、その仕事の技術なり方法なりを持っていて、大工さんは家の建てる技術・方法を持っており、自動車学校の先生は、運転技術を身につけてさせる技術なり方法なりを持っている。

なぜ、学校の教師だけが「とにかくやってみます」という程度のこと、許されるのか？なぜ教育の技術なり方法なりを持っていないで、子どもを教育するという大それたことをやっていらっしゃるのか？

私は不思議である。

授業開始のチャイムが鳴り終わった。子どもたちの前に立った私は、一つの指示を与えた（なお、私は「起立」というようなことはやらない）。このような形式で授業を導するのが私は嫌いである。中には、研究授業の時は参観者に向って「起立、礼」をさせている教師がいる。私は率直に言えば、このような行為を子どもにさせるのは反吐が止まらないのである。それだけで、もうその教室から逃げ出しちゃくなる。

私は子どもたちの前に立って「全員起立」と静かに言ったのである。そして「プリントを読み終わったら必ずわざとい」と続けた。

これだけである。これですべてである。」

飛び箱を跳ばせるためには、腕を支点とした体重移動を体感させねばならないのです。跳び箱を跳ばせられるかどうかは、このことにつきるといつても過言ではありません。

中には習っている子どもがわいそうだと思いたくなるような教師もいる。

伸びる資質の教師もあれば、反対の教師もある。

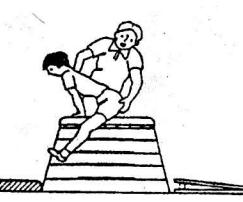
子どもの心だけ、それが事実である。

駄目な教師にも共通点がある。簡単に共通点を述べてみる。

一 駄目な教師の共通項、それは、「子どもができない」「子どもがきちんとしない」責任を他人のせいにすることである。これは、顕著な共通性である。「この子ども」の場合は、親に問題があるんだ」「前の担任が悪かったから駄目なのだ」この種の愚痴なく続く。「できない子をできるようにすること」や「きちんとしない子をきちんとすること」これこそが教師の仕事なのである。



(A) の方法



(B) の方法

私は、体重移動の方法を、つきの一つの方法で行きます（以下、本書では、(A) の方法、(B) の方法とします）。

授業の原則

1 第一条＝趣意説明の原則 / 12

2 第二条＝一時一事の原則 / 19

3 第三条＝簡明の原則 / 22

4 第四条＝全員の原則 / 27

5 第五条＝所持物の原則 / 35

6 第六条＝細分化の原則 / 39

7 第七条＝空白禁止の原則 / 43

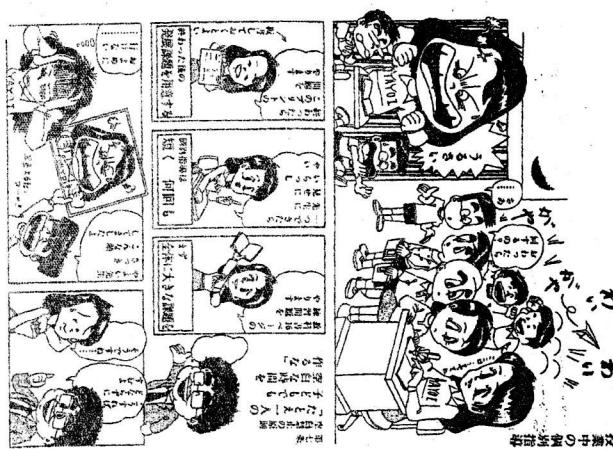
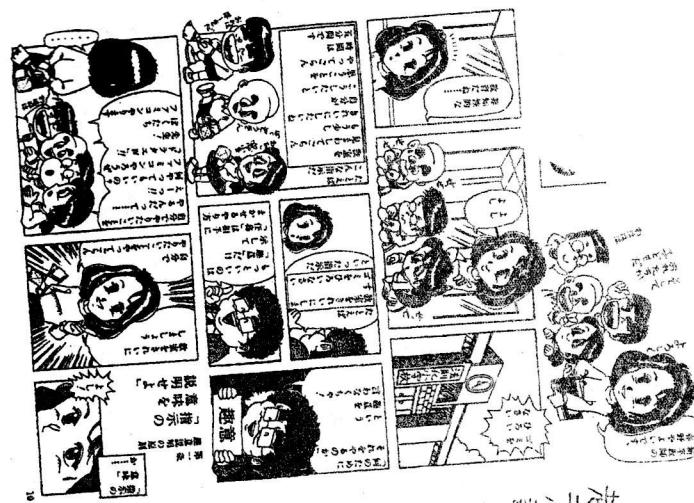
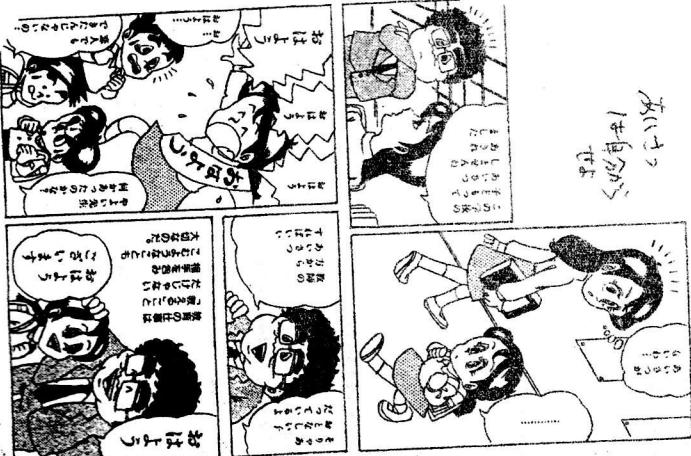
8 第八条＝確認の原則 / 47

9 不完全個別化の原則 / 49

365日の法則

教師の仕事

向山洋一・前田康裕 著



教職根元論(12月13日) リアクション

参考用の支給手帳、矢崎義につけ

前回のリニアコンを読んで、グループのはとんどが日本の考え方。
大事だと思っていることがわかりました。彼らとの距離が近いほど
授業も楽しく行えますのは“かた”と思うところも意見が同じであります
これがわからずいた。メタメソッド似た部分が多くあって自信力教師
像や掌管づくりに対して同じ方向性になっていたと思ひます。
向山洋一郎のアドバイスに関しては、指導の仕方として良“悪”が二つあります
と書かれていたので、参考にしながら思います。メタなどと指摘するのは
多く、未だでは良いところを見つけて集めるところは実践してい
ます。これは、普段の生活でも行えそうなので訓練していくと思ひます。
また問題をやさしくして、途中すこしだけはやうげな半分もされかねません。指導要
領をしっかり読まずにはいけない”ということがわからずいた。他の問題も解いてからで
自分の足りないところを見つけていたと思ひます。

6

放師は、児童生徒や保護者に対して、優しいジャーナリスト命は姿勢、努力だけではなく、信頼にかけ、頼りいよいよに感じるだろう。放師は放えることの専門家であるため、教育方法・技術について十分な力が備わっていることが求められて当然である。和やかな学生は、気持ちはあるので、教育技術については未熟で、これからそれを身につけていく段階である。現場に出合はると身に付けることができないことも多いだろう。放師は、もう教員としてまだ大半は職業であると思つた。授業もそうであるが、生徒指導もさて、他の様な力、知識が求められる。それなのに、放師はばかりか、保護者から一方的に要求を押しつけられることばかりで理不尽で、おかしく思ふ。

16/30 間 最後の教養問題は何度か解いた。全部上手。

7

資格として取得した時点で教師としての最低ラインはクリアしていると考えることもできる。しかし教師としての能力は、ペーパーテストや面接だけではなくことはできない。そして、常に教えるについて模索していく必要があると感じた。教師として、技術の向上が必要なことに改めてせられた。

「駄目な教師の共通点を説いて見て、たゞひと題、駄目な教師の特徴を述べておきたい」と云ふ。では、子供が好きなように自分の工夫を出来るようになるまで、教員は続けることばつづけておこう。

1

3/13 正門は なんとかして
でも、到底、しなければならないことがありますので、そこ
きちんと勉強しようと思います。

8

教職教育の問題点をやめて感じたことは、直後に少し似ていて、それをいくつか印象的だ。しかし解いてみると結構大体は難しくて感じた。まだ勉強不足だった。意外でいたので想像より悪かった。最後の英語の問題は直ちこのテストで問題として出るのだけれど、最後八分の二時間も少し足らず考査時間があつたから、少し勉強したと思った。

下 125

意外に試験問題は今までに学習したものばかりで、60点中30点いかず取れなかつた。もう少し学習しないといまいと思ふ。教職教養、試験一矢筆で平均点が39.5という二つで、アレ少しだけ、和には超えられそうにならぬ感じでいた。

15

今回の搭載率の配布は以下の通り。
新規登録者 - 搭載率 K=2.0、既存登録者 - K=1.5
新規登録者 - 817(1名) × 搭載率 K=2.0 = 1634名(10名)
新規登録者 - 2名 × 搭載率 K=1.5 = 3名
合計 = 1637名

1 / 1